

# 「ている」と「ていた」の叙想性について

秋 月 康 夫

1. 叙実性と叙想性
2. 「財布が落ちています」の叙想性
3. 主体変化動詞につく「ている」「ていた」と叙想性
4. 「ていたところだ」の叙想性
5. 継続動詞につく「ていた」と叙想性
6. 「ている」と「ていた」の叙想性

## 1. 叙実性と叙想性

本稿では、「ている」と「ていた」<sup>1)</sup>の表現がもつ叙想性について考察する。ここでいう叙想性とは、広い意味で、事実としての事態の描写とは異なる要素が、形式の意味として、その形式によって構造的にもたらされる性質のことを言う。

一般に「ている」の基本的な意味は進行継続と結果残存であるといわれる。また、「た」の基本的な意味は過去であるといわれる。ここで考察したいことは、進行継続、あるいは結果残存が必ずしも客観的事態として観察されることがらの描写であるとは言えない場合に使用される「ている」が表す意味であり、必ずしも過去の事態の描写であるとは言えない場合に使用される「ていた」が表す意味である。そうした場合の用法を従来の言い方を踏襲して「叙想的」と呼ぶことにするが、これら叙想的な用法をもたらしたり、制限したりしている構造を明らかにすることが、本稿の目的である。

叙実と叙想を分けて考えることは、寺村(1984)が「た」について同書の本節で「比較的客観的な、‘時’またはコトの‘ありよう’の認識・表

出と考えられる」ものを扱ったのちに、「付録「タ」の意味と機能」において「更に多様な、話し手の複雑な心理の表出というべきもの」を「ムードのタ」と呼んで考察したことに始まる。そこでは、「過去の事実についての確言」を表す「タ」をテンスの用法とし、そこからはみ出している「タ」の用法をムードに属するものと捉えたことになる。

これを受けて工藤（1995）は、「シタ、シテイタ、スル、シテイル」の4形式に全体にわたり、「叙想的な用法」あるいは「モーダルな用法」を他の用法から区別している。そこで工藤が区別した8つの「モーダル」な用法は図1-1のようにまとめられている。

形式	モーダルな意味	動詞のタイプ	構文的条件
シタ	感情・感覚表出	内的情態動詞	1人称主語
シタ	差し迫った要求	限られた意志動詞	限られた構文
シテイタ	発見、想起		
スル	実行性	遂行動詞	1人称主語
スル	態度表明 感情・感覚表出	内的情態動詞	1人称主語
スル	直接的知覚の表出		
スル	感情・評価的態度 の表出		副詞との共起
スル シテイル	心理的現存性の表出		〈ノダ文〉

図1-1

一方、益岡（2000）も寺村（1984）を踏襲して、現在の事態を表現していると考えられるにもかかわらず「タ」が用いられる文での「タ」の用法を「叙想的テンス」と呼び、再整理した。それによれば、叙想的テンスの「タ」は、次の6種類に分類される。

- a. 発見（ああ、こんなところにあった。）
- b. 想起（そうだ、明日は休みだった。）
- c. 確認（君は確か岡山の出身だったね。）
- d. 命令（さあ、行った、行った。）
- e. 判断の内容の仮想（早く帰ったほうがいいよ。）

f. 反事実性（僕に財産があったなら、何でも買ってあげられるのに。）

このように、従来の「叙想性」のとらえ方は、

[1] 文全体をみたときの言語行為や言表態度を基準にした分類と関連し

[2] それらを「ムード」あるいは「モダリティ」としてとらえ

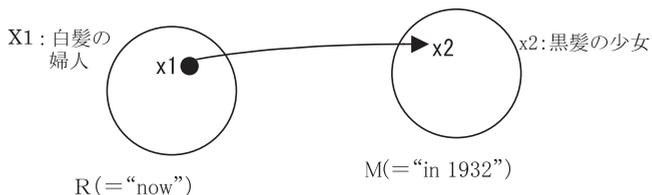
[3] おもに「タ」の「テンス」から「ムード」あるいは「モダリティ」への転用もしくは拡張として理解する

という枠組みのなかにあったことがわかる。工藤（1995）は、「スル、シテイル」からも「モーダルな意味」を抽出しているが、それらと「タ、シテイタ」から抽出される「モーダルな意味」との関連が明らかにされてはおらず、より広い枠組みのなか位置づけたとは言い難い。

ところで、Gilles Fauconnier のメンタルスペース論では、テンスに関連して、in 1932, last year, next time you' re here のような時の副詞句をスペース導入表現であるとしている。これらは、つぎの例のように時間スペースをつくることになる。

In 1932, the lady with white hair was a dark-haired girl.

（1932年には、その白髪の婦人は黒髪の少女だった。）



フォコニエ（1996）より・改 図 1-2

このように、メンタルスペース論では、文全体として過去や現在のある

時点での事実を述べるものであっても、その文を構成する要素一つ一つを別々の時間スペースに配置したり、同一の語で示されている要素を別々のスペースに配置したのちに照応させたりすることができる。そうすることによって、文の意味のなかにまぎれている時間的に異なる要素や、話者の想像による要素を図示することが可能になる。この方法で記述することにより、叙実的な文のなかにある叙想的な要素を抽出することができれば、それは、叙想的な要素をすべて「ムード」あるいは「モダリティ」として処理してきた議論の枠組みを変えることにつながるだろう。

本稿では、叙実性と叙想性の区別を、「ムード」あるいは「モダリティ」論からいったん切り離し、話者が事実であると確認したことがらを叙述しているか、そうでないかを要素とことがら一つ一つに即して区分することとする。そして、文全体のタイプが事実についての確言である場合も含めて、「タ」と「テイ(ル)」本来の用法自体が、話者の内心においても事実として確認されないものを事実であるかのように表現するしくみを含んでいるという立場をとる。たとえば「ドアが開いている。」という表現について、「ドアが開いた状態」については叙実的であるとしても、「ドアが開く過程」については事実であると確認されているとは限らず叙想的であるとする。つまり、全体として事実を述べている文であるとしても、叙述することがらの一部に想像が含まれていれば、そこに叙想性があると考えられ、事実の叙述を含む発話に、聞き手の想像をうながすことによって伝えたい内容が、いわゆる含意として存在している場合も、そこに叙想性があるとする。そして、従来、叙想的な用法とされてきたもののなかには、こうした叙想性が拡大されたものがあるという説明を試みる。また、この立場から特に、従来「テいた」の形式について考えられていた叙想性が、「タ」の働きではなく、「テイ(ル)」が構造的に持つ叙想性の働きによるものであると説明すべき場合があることを指摘するものである。

## 2. 「財布が落ちています」の叙想性

井上・越生(1997)は「相手の服のボタンがとれているのを見てその相手に言う」という状況で日本語では「? ボタンが落ちた。」は不自然で

「ボタンが落ちている。」が自然であり、韓国語では「단추 떨어졌다.」「단추 떨어져 있다.」がともに適格となるという現象をあげ、「日本語では変化を直接知覚しないと『タ』を使いにくいが、朝鮮語の『었』にはそのような制約がない」と指摘している。

	相手の服のボタンが とれているのを見て 相手に…	
過去形	? ボタンが 落ちた。	○ 단추 떨어졌다.
結果残存形	○ ボタンが 落ちている。	○ 단추 떨어져 있다.

図 2-1

ここで「変化を直接知覚」するというのには

- ・ 変化が起きたときの様子を話者が見たり聞いたりして直接知覚している
- ・ 変化前の状況および変化原因を直接知覚している場合

の2種類があるという。前者は、目の前で財布を落とした人に対して「財布、落ちましたよ。」と指摘する場合などが当てはまり、後者には、「夜、台風が通り過ぎた。強い風で庭の大切にしている松の枝が折れたのではないかと思った。そして朝、庭の松を見た」という状況で「やっぱり折れたか。」あるいは、「やっぱり折れているか。」のように言う例があてはまるが、この場合は日本語でも「タ」と「ている」の両方が使用できる。

	夜、台風が通り過ぎた。強い風で庭の大切にしている松の枝が折れたのではないかと思った。朝、庭の松を見て…	
過去形	○ やっぱり折れたか	○ 역시 부러졌구나.
結果残存形	○ やっぱり折れているか	○ 역시 부러져 있구나.

図 2-2

曹（2003）は、メンタルスペース理論によりこの現象を説明することを試みている。それによれば、こうした発話は心的スペース内で行われており、テンス・アスペクトの理念型として想定された「心的パーフェクト」

によって説明される。それは、視点を発話時から、描写したいことがらの成立する時点をとびこえて、相対的に未来へと移しててから、回り込むようにして事態を反対側の時間から観察した様子を過去形で表現したものである。

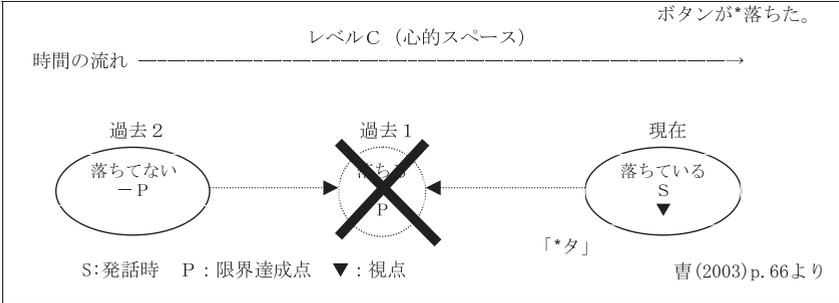


図 2-3

曹 (2003) によれば、日本語のばあい「相手の服のボタンがとれているのを見てその相手に言う」という状況においては語用論的制約があり、「現在」スペースから「過去1」のスペースを振り返ることは不可能であり、したがって心的表示「タ」は許容されないということになる。

しかしながら、この説明には問題がある。「落ちる」というプロセスが知覚されないにしても、もしもそれが事実だと考えられることがなければ、実際には「落ちている」という表現も不可能になってしまうからである。たとえば屋根の近くの地面で雪が山になっているのを偶然見たときには「雪が落ちている」と言えるのに対して、周囲に建物がない道路を雪が覆っているのを偶然見たときに「\*雪が落ちている」とは言わない。それは、話者が雪が「落ちた」ものであるか「積もった」ものであるかを区別するための判断をしているからであろう。道路にネコの死骸がある場合にも、「\*ネコが落ちている」とは言わない。「ネコが道路に落ちてくる」という事実があったとは想像しがたいからである。つまり、「落ちている」という形式が容認され「落ちた」では容認されない文の場合であったとしても、「落ちた」という事実の認識は心的に実現していると考えるべきではないだろうか。



前述のように、どちらの場合も、目の前の事態が「財布が落ちる」というプロセスを経たものであることは認識されているはずである。違うのは、前者は決定的なイベントに焦点をあてて表現しようとしたものであり、後者はアクチュアルな状態とのコンタクトを維持しつつ表現しようとしたものであるという点である。

このように、韓国語との対照から、以下のことがわかる。

- (1) 日本語の文法においては、目の前の事態を参照する場合の表現として「タ」によるものと「ている」によるものの違いを記述する必要があること
- (2) その際、「財布が落ちたよ。」のような「タ」による表現は、「落ちた」という変化が生じたことに焦点を当てれば、その変化事態が過去のものであることから「タ」が使用されることはもちろん、「落ちた」の今の現在における結果残存の状態に焦点を当てている場合にも、「落ちる」過程の観察や、「落ちる」という変化が生起するかどうかに関する探索が過去に行われ、課題が設定された過去の時点にアクセスしていることから「タ」が使用されるのであり、「タ」が、現在のことがらを過去のことであるかのように叙想する機能に由来するものではないし、そもそも「タ」がそのような機能を持っているわけでもない。
- (3) 「財布が落ちているよ。」における「ている」は、実際には「財布が落ちた」という事実を確認せずとも使用される。ここに「ている」の叙想性が認められる。すなわち、結果残存を表す「ている」が使用されることで、その結果残存の状態をもたらした動作や変化が叙想されているのである。

ここで(3)において観察された「ている」の叙想性については、次章でさらに検討する。

### 3. 結果残存の「ている」「ていた」と叙想性

庵(2001)は「テイ(ル)」の機能を「広義継続相」と「完了相」に大別することを提案し、工藤(1995)の「パーフェクト相」のうち「効力持続」「記録」の用法のみを「広義継続相」に属する「パーフェクト相」として認め、「完了」「反事実」の用法は「完了相」に含めている。

	工藤(1995, 1997)* <sup>18</sup>	庵(2001)	
進行中	継続相	(狭義)継続相	広義継続相
結果残存			
繰り返し	反復相		
効力持続	パーフェクト相	パーフェクト相	完了相
記録			
完了			
反事実			

図 3-1

ここで、「効力持続」「記録」「完了」「反事実」の用法とは、それぞれ次のようなものである。

- d. 効力持続 この橋は5年前に壊れている。
- e. 記録 犯人は3日前にこの店でうどんを食べている。
- f. 完了 彼からの手紙を受け取ったとき、彼は既に死んでいた。
- g. 反事実 彼が助けてくれなかったら、私は死んでいた。

このうち庵(2001)は「d.」と「e.」については「出来事時と観察時が結びつけられており、そこに継続を読み取ることができる」としているが、

「f.」の「既に死んでいた」における「テイ(ル)」は「手紙を受け取ったとき」の「以前」を表してはいるものの、「死んだ」という出来事時が内容的に「手紙を受け取った」という観察時に結びつけられているのではないと批判し、次のように主張する。

「- てい -」の意味として「継続」の他に「以前」を立てるとするのは、言い換えれば「完了」と「効力持続」を区別するということでもある。両者を区別する理由は「- てい -」の機能が異なることにある。つまり、「効力持続」の場合、「- てい -」は観察時以前の動作・出来事の効力が観察時において認められることに焦点があるのに対し、「完了」の場合は動作・出来事が基準時以前であることに焦点があるのである。言い換えれば、動作・出来事の位置づけの方向性が2つの用法では正反対であるということである。

そして、「g.」においては、他の言語で仮定法を表す主節では直説法より1つ前の時制を表す形式が使われることに相当するものだとし、「f.」とひとまとめにして考えている。

本稿は、庵(2001)のこの考察を認めつつも、2.で考察したように「反事実」の用法に限らず「テイ(ル)」の基本的な用法である「結果残存」の用法においても叙想性が認められるという立場から、「d.」「e.」「f.」「g.」のすべて、すなわち工藤(1995)の「パーフェクト相」の全体を「結果残存」からの派生的な関係にあるものとして統一的に理解することを提案したい。

まず、「財布が落ちています。」と指摘する場合、これを典型的な「結果残存」の用法とみれば、その意味するところは次のように図3-2のように示せるだろう。しかし、2.で考察したように、これらのすべての要素が現実のできごととして確認されている必要はない。朝、起きて、屋外に寝る前にはなかった雪を認めたが、その時点で雪が降っていないというとき、「雪が積もっている。」と言うのは自然な発話であろうが、「雪が積もった」ということがら自体は話者の想像である。このことを図示すれば、図3-3のようになるだろう。

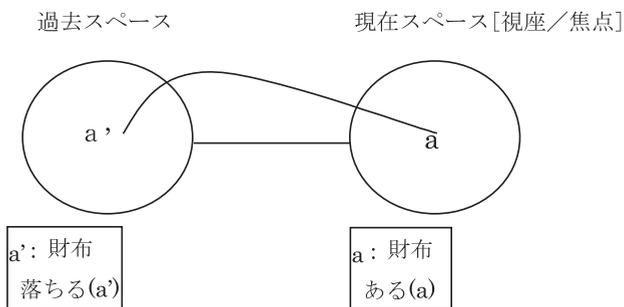


図 3-2

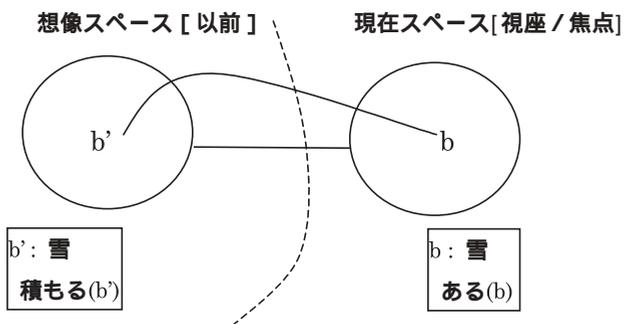


図 3-3

ここでは簡略化して表示したが<sup>3)</sup>、文全体の意味は、想像スペースと現在スペースの両方から合成されたものとして表現できる。「ている」では、その合成において、視座のあるアクティブなスペースの相手として想像スペースをとることができる。これに対し「財布が落ちたよ。」「雪が積もった。」などの表現は、変化以前の状態を知っているか、変化の過程を目撃していることが使用の条件になるので、現実の現在スペースには現実の過去スペースしか結びつけられないということになる。

「ている」は過去スペースと想像スペースを結びつけることもできる。「d.」の「この橋は5年前に壊れている。」において、現在、その橋が「壊れた状態」であるかどうかは明示されているわけではない。発話の意図は、状況により、「修理されないまま使用が禁止されている」ということなのかもしれないし、「その後、修理されたが、また壊れるかもしれない壊れ

やすい橋だ」ということである可能性もある。しかし、「ている」が使用されていることになり、何らかの含意があるということが示され、聞き手がその含意を解釈することを発話が要求しているということは言えるだろう。このことを図示すると、図 3-4 のようになる。

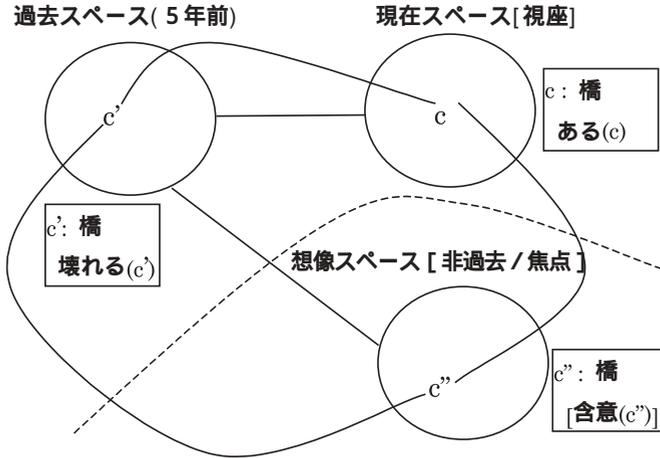


図 3-4

「e.」の「犯人は3日前にこの店でうどんを食べている。」の場合、現在において物質的な痕跡となるものはないと考えられる。

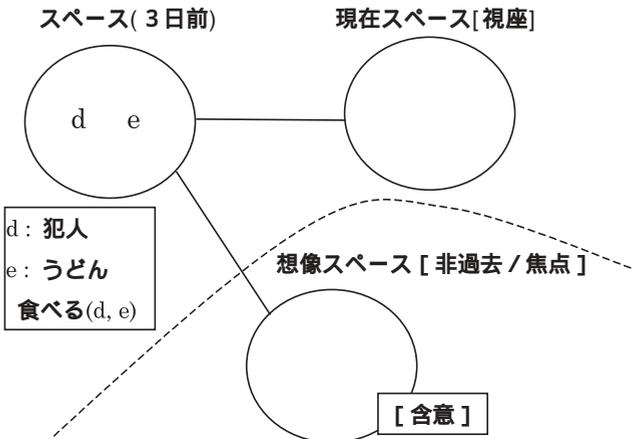


図 3-5

「含意」は明示されたものでなく、たとえば「犯人はうどん好きなのだろう」というような推測である場合もあるのだから、事実である必要もない。従って、それは想像スペースのなかに作られる。含意が表現される想像スペースのなかには「犯人」に対応する要素があることもあれば、ないこともあるだろう（すでに「犯人」は存在しないということもあるし、犯人とは関係のないことが含意されることもある）。要するに、そこにスペースが作られるということが重要なのであり、スペースの中身は、明示されたもの以外は聞き手の解釈によって埋められていく。

以上のように考えることにより、「g。」の「反事実」の例、「彼が助けくれなかったら、私は死んでいた。」も、「d.」「e.」と同様の「結果残存」の用法の延長として図3-6のように処理できる。

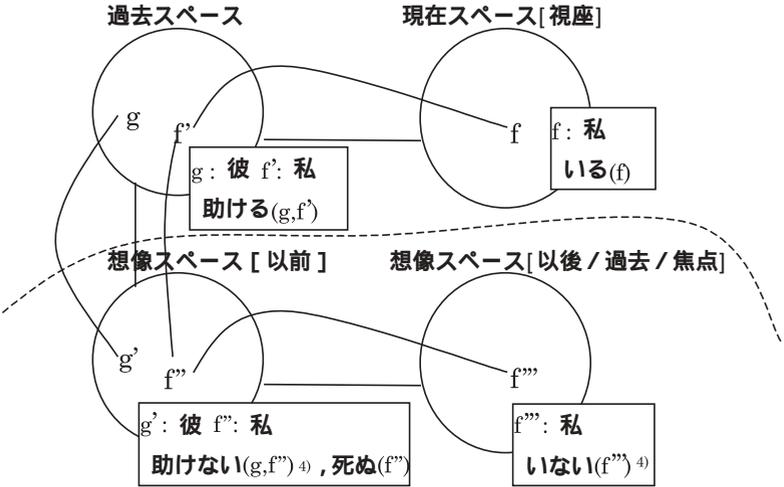


図 3-6

この図で、「想像スペース - 以前」と「想像スペース - 以後」との関係は、「財布が落ちています。」と指摘する場合の「過去スペース」と「現在スペース」との関係と変わるところはない。また、ここでは主節が「タ」としていることに合わせて「想像スペース - 以後」の属性を「過去」としたが、「反事実」の例文は、「彼が助けくれなかったら、とっくに私は死んでいるだろう。」のように主節が非過去形である場合もある。「仮定法を

表す主節では直説法より1つ前の時制を表す形式が使われる」ということを「g.」の説明の前提にしている庵(2001)では、このことを説明できないが、本稿の立場に立てば、図3-7のように簡単に図示できる。

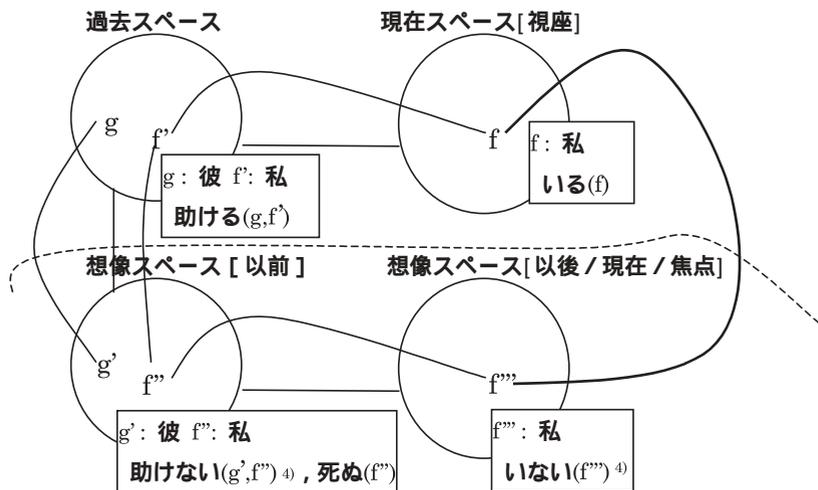


図 3-7

両方の図に明らかに示したように、主節に「タ」がある場合も、ない場合も、「テイ(ル)」自体の機能は変わらない。相違点は、主節が非過去形である場合には、「想像スペース - 以後」の属性が「現在」であり、そこにおける要素「f'': 私」が「現在スペース」の「f: 私」に結びつけられているところである。これは、「現実の自分と、他にありえた可能性としての自分」の状態を比較するという発話の持つ意味に対応する点で、日本語話者の実感にそぐうものであろう。そして、それ以外の点で両者の構造は変わらないということも、どちらも「反事実」の文であるという事実と合致している。

以上の理由により、庵(2001)のように「g.」の「反事実」の用法を「d. 効力持続」「e. 記録」とは別の「完了」のカテゴリーに配属させることは不相当であると考えられる。これもまた、「結果残存」の用法からの派生であり、「テイ(ル)」が結びつけている出来事時と観察時双方のスペースが想

像スペースになったケースが「反事実」の用法になっているのにすぎない。そして、前述のように、結びつけているスペースが想像スペースになるという意味での叙想性は、実は、基本的な用法とされる「結果残存」の用法においても見られる現象なのであり、「反事実」の用法は、出来事時スペースにおいては、はっきりと過去の事実に反する仮定として叙想性が現れている点と、それに対する帰結を述べる観察時に相当するスペースにも叙想性が現れているという点で、叙想性が極端に拡大されたものとしてとらえることができる。

最後に「f.」の「完了」について考察する。例文の「彼からの手紙を受け取ったとき、彼は既に死んでいた。」では、「彼が死んだ」のが「手紙を受け取った」ことよりも前の出来事であることを示すのに「ていた」が使われているとされる。そして、「彼が死んだ」ことが「手紙を受け取った」という時点で、受け取った人物やそれをとりまく状況に対して何らかの具体的な「効力」を及ぼしているとは考えにくいことが、庵(2001)が、この用法を「d.」「e.」とは別のカテゴリーに分類する根拠になった。

まず、その妥当性を考察する前に、この例文は「彼からの手紙を受け取ったとき、彼は既に死んでいる。」のように主節を非過去形にしたとしても、「彼が死んだ」のが「手紙を受け取った」ことよりも前の出来事であることを示す文としてじゅうぶんに成り立つことを指摘しておきたい。従属節よりも以前のことを表す、いわば意味上は大過去である主節が非過去形であっても構わないというのは、いっけん奇妙なことであるが、これは日本語においては、「彼からの手紙を受け取ったとき」という、過去スペースの導入表現があったときに、すぐさま、その過去スペースのなかに視座を移動できるという性質があるからである。このことは小説のような文章においては珍しいことではない。そして、このことは、ふりかえって「ていた」が使われていた「彼からの手紙を受け取ったとき、彼は既に死んでいた。」においても、「彼が死んだ」ことと「手紙を受け取った」ことの前後関係を示しているのは「タ」ではなく「テイ(ル)」の機能であるということを示している。庵(2001)は、この前後関係を指示する機能を主とする用法を、他の用法と区別して分類しようとしたが、考えてみれば「テイ(ル)」が出来事の順序において一時的後退性を表すということは、

「結果残存」の用法をはじめ、「d.」「e.」「g.」の用法においても変わらない。ほかの用法にない性質を持っているのであれば別のカテゴリーに入れることに意味があるだろうが、むしろ「f.」は、他の用法と共通のある性質が際立ち、それ以外の共通の性質が極端に弱くなったものと考えらることで、統一した理解のもとにおくことができるのである。「彼からの手紙を受け取ったとき、彼は既に死んでいた。」であれば、以下のように図示できる。

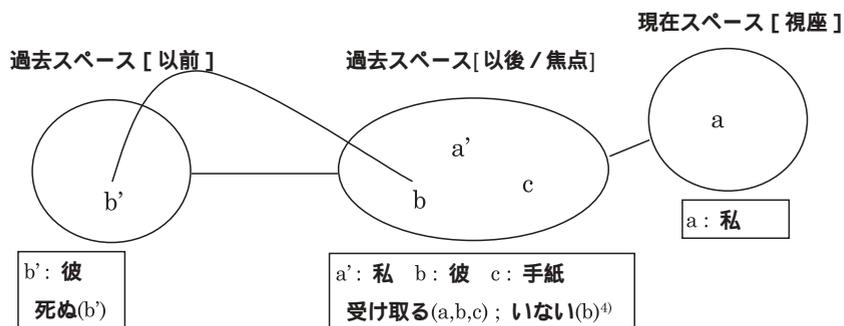


図 3-8

「彼からの手紙を受け取ったとき、彼は既に死んでいる。」であれば、以下のようなようである。

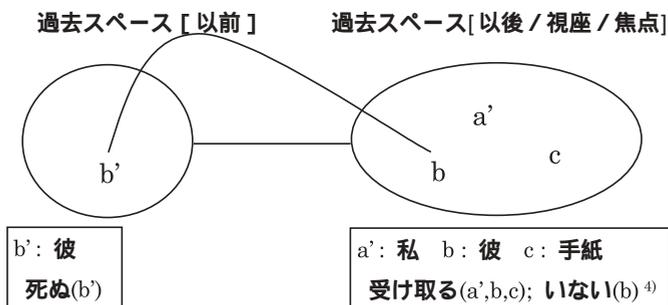


図 3-9

「以前」スペースと「以後」スペースの内容的な関係は、「A が B からの手

紙を受け取ったとき、Cは既に死んでいる。」のようにすれば、もっと薄くなるだろう。そうなれば、効力の持続どころか、要素間の対応関係もなくなってしまう。だが、これを「ている」のかわりに「タ」をつかって「AがBからの手紙を受け取った。Cは既に死んだ。」とすると、「手紙を受け取った」ことと「Cが死んだ」こととの前後関係がはっきりしなくなってしまう。このことから、「タ」は、典型的には発話時における話者であり語りの文章のなかでは話者が視座をおいている場面の時点である基準点から見たときの「過去」のマーカであるのに対して、「テイ(ル)」は、異なるイベントの生じているスペースとスペースの間の前後関係を表しているということがわかる。

以上のことから、「結果残存」を中心とした「効力持続」「記録」「完了」「反事実」の用法で使われる「テイ(ル)」の構造を図3-10のように示してよいであろう。

スペースB [以前 / イベント]      スペースA [以後 / 焦点]

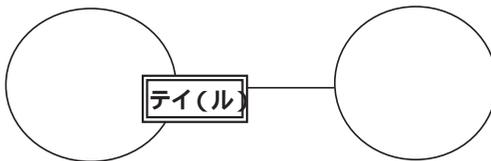


図 3-10

その上で、各用法は次のように整理できる。

	スペースB	スペースA	AとBとの要素の対応
結果残存	過去 / 想像	現在	あり
効力持続	過去	想像	あり
記録	過去	想像	なし
完了	以後(現実)	以前(現実)	あり / なし
反事実	想像	想像	あり (現実スペースとの要素の対応もあり)

図 3-11

#### 4. 「テいたところだ」の叙想性

秋月（2003）でも述べているように、「テいたところだ」で終結する文において、「ところだ」の前の「テいた」はテンス対立が中和され、アスペクト対立のなかにおかれる。そのときの「テいた」の表すアスペクトを「途切れ相」と名付け、その内容を定義すると以下ようになる。

動作・変化の進行や、変化によってつくられた状態の継続が、その内的限界によって完了するのではない形で切れ目を生じ、そのまま状態が継続するかどうか不明な局面

これを図示すると図 4-1 のようになる。

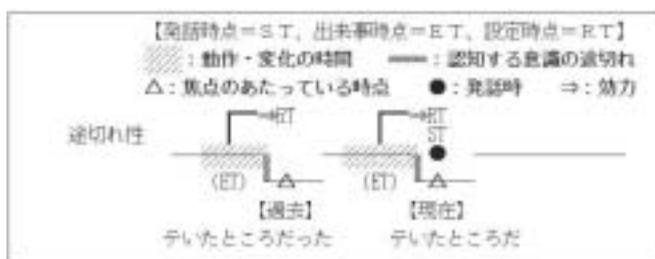


図 4-1

「テいたところだ」の表現に共通な事実として、前接する動詞があらゆる動きについて、現在の直前まで＜動作継続＞が見られたことを示すということがあげられる。そこで、現在においても、そのままその動きが継続しているか、止まっているかの両方の可能性がある。そこで、この2つの可能性を中心に文例をみってみる。

1) やっぱり人気がでましたね。わたしもあの歌手は気になっていたところですよ。

2) (地震発生時の状況をきいて)

A : その時間はなにをされてました？

B：荷物をまとめて今から出ようとしていました。家の外にいて村の方々と「お別れを」と話していたところです。《ジ》

- 3) この資料探してました。探しても見つからなかったので、何を調べればいいのか困っていたところです。助かりました。  
《オ》

発話時現在をまたいで前接する動作の進行が継続していくとみなせる文例もある一方、そうでない文例、つまり「中断」をひきおこしていると解釈できるものもおおいことがわかる。1) は前者であり、2) 3) は後者である。1) は「テいるところだ」に書き換えても大きく意味が変わらないが、2) 3) をそうすると、非文になるか、意味が変わってしまう。

1') やっぱり人気がでましたね。

わたしもあの歌手は気になっているところです。

2')(地震発生時の状況をきいて)

A：その時間はなにをされてました？

B：荷物をまとめて今から出ようとしていました。

×家の外にいて村の方々と「お別れを」と話しているところです。

3') この資料探してました。探しても見つからなかったので、

×何を調べればいいのか困っているところです。助かりました。

1) と1') についてもニュアンスの差は感じられる。1) で、「気になっていたところですよ」は、人気が出てきているということを知らずに「気になっていたが、いま人気が出てきていることを聞いて、自分の判断がまちがっていないことが裏付けられたということを行っているようである。これに対して、1') の「気になっているところですよ」は、同様の場合にも使えるが、実際に人気が出てきたのを見てから「気になり」始めたというときに使うほうが自然であるように思われる。なお、「デビューの時から」などの語

がつくと、「ているところだ」も「ていたところだ」も使えなくなる。

- 1') やっぱり人気がでましたね。わたしもあの歌手はデビューの時から  
気になって{ × いたところ / × いるところ }です。

これは「ところだ」が現在にのみ焦点をあわせるということを裏付けている。

このように、「ていたところだ」は、たとえ前接する「～テ」の表す内容が中断されていないとしても、それに関連して新しい展開が生じているとみることができるのに対して、「ているところだ」は、そのような新しい展開がないか、あったとしても影響をうけずに同じ状態がそのまま進行することを表現しようとするものである。かといって、「ていたところだ」は完了を表しているのでもない。たとえば2)をみれば、動きが中断されていると思われる場合であっても、その動きが内的限界や、行為者の意志によって完了したのではなく、新しい展開によって進行を止められていることがわかる。また、1)のように現実世界での動きに中断がみられない場合には、表現者の認知レベルでの認識の途切れが、この表現に関与しているということが出来る。さらに、内的情態動詞の場合にはそもそも終了限界がはっきりしないという特徴があるが、3)のように、その内的情態をもたらしていると思われる事態の継続が1)と同じく新しい展開によって進行を止められ、その結果、内的情態に対しても表現者の認知レベルでの認識の途切れが生じ、その瞬間から、それまでの内的情態(「困っている」)の継続は中断したものであるとみなせる場合もある。よって、<中断>をもたらす場合にしろ、そうでないにしろ、

- 1] その<中断>をもたらしうるような新しい展開がある
- 2] 表現者の認知レベルでの認識の途切れが生じている

という共通点があるということがわかる。

## 5. 継続動詞につく「ていた」と叙想性

「ていた」のアスペクト的性格は、「ていたところだ」という表現で実現されているだけではなく、「...p...ていたところ、...q...」という構文も説明できる。

「...p...ていたところ、...q...」という構文は、新聞記事などに頻繁に現れるが、**という事件がおきたときに、それに先立つ背景の状況が**であったことをしめしている。これは、「...q...。...p...ていたところだ(った)」と書き換えることができる。

- 4) 警察は男の行方を捜していたところ、路上で不審な人物を発見した。《マ改》
- 5) 警察は路上で不審な人物を発見した。男の行方を捜していたところだった。

「ていたところだ」文の意味構造はこれに由来するとみることができ、qが明示されていないときには、qにあたる部分は現在の眼前の状況であると解釈できる。

- 6) (警察が不審な人物を尋問しながら)  
強盗事件があって、逃走した男の行方を捜していたところです。  
特徴が一致するので職務質問をします。

このように、「ていたところだ」にはqにあたる「できごと」の存在が含意されており、それが事態に<途切れ>をもたらすと考えることができる。

以上のように、<途切れ相>は、「ていたところだ」以外にも「ていた」がアスペクト対立のなかにおかれたときのアスペクトとして現れる。下記1)～3)における「ていた」は<現在に対する後退性>を示す<途切れ相現在>である。

7) すてきですね。前からこんなネクタイがほしいと思っていたんです。《ブ改》

8) 「本をさがしているんですか。」「ええ。弟がほしがっていた日本の本をさがしていたんですが、ここにはないようです。」

9) そのとおりです。僕もさっきから同じことを言おうとしていました。《イ改》

これらは、

[1] 設定時点が過去ではなく、発話時現在であると考られる

[2] 「思う」「さがす」「言おうとする」などの動詞が表す事態の<完成性>と<効力>とがはっきりと分離しておらず、過去において「思っていた」「さがしていた」「言おうとしていた」という事実の<効力>は現在や近い未来においても「思っている」「さがしている」「言おうとしている」に違いないという、<断続的進行>として捉えられている

という2点で、<過去パーフェクト>とは異なっている。これらの文は現在テンスの会話の中には含まれており、過去における事態と設定時点である現在の状態とを複合的に表現していることは<現在パーフェクト>と共通であるが、

[1] これらの文の「ていた」を「ている」に書き換えれば、<動作継続>を表してしまう

[2] これらの文には「思いおわった」「さがしおわった」「言おうとしおわった」というような完了のニュアンスは現れない

[3] したがってこれらの文の「ていた」を「た」には書き換えられない

という点で、<現在パーフェクト>とも異なっている。以上に見たよう

なく途切れ相>とその他のアスペクトの種類の違いを表にすれば、図 5-1 のようになる。

	完成相	継続相	パーフェクト相	途切れ相	反復相
現在	/	ている	ている タ	ていた★	スル ている
過去	タ	ていた	ていた		ていた タ
	↓	↓	↓	↓	↓
タクシス	継起性	同時性	後退性		背景的同时性 (説明)
【表の注記】 ★が、「ていた」の<現在に対する後退性>の用法					

【表の注記】 が、「ていた」の<現在に対する後退性>の用法

図 5-1

4. で「ていたところだ」について、たとえ前接する「～テ」の表す内容が中断されていないとしても、それに関連して新しい展開が生じているとみることができるということを述べたが、このことは途切れ相をつくる「ていた」全般に言えることである。すなわち、途切れ相は、継続してきた動きに「変容」「中断」ないしは「認知的な切れ目」が生じた局面を表している。

10) 強盗事件があって、逃走した男の行方を捜していたところです。  
特徴が一致するので職務質問をします。

11) 「もしもし。いま、いい？」  
「ごめん。いま、ねてたとこなんだ。」

12) やっぱり人気がでましたね。わたしもあの歌手は気になっていた  
ところです。

10) が「変容」、11) が「中断」、12) が「認知的な切れ目」である。このうち「中断」の場合には、「ていたところだ」は現在における<動作継続>である「ているところだ」では表すことのできない現実世界の事態を表現しているので、ほんらい現在ではない「過去」における継続をあらわ

す形式である「ていた」が現在のアスペクト的事態を表すために転用されたとしても叙実法的であるということが出来る。しかし、「変容」ないしは「認知的な切れ目」が生じた局面を途切れ相で表現することは、「ているところだ」でも表現することができる事態をわざわざ「ていたところだ」で表現するということであり、しかも、そこでの「変容」ないしは「認知的な切れ目」は、現実世界における事態の変化に対応しておらず、もっぱら話者の認知的な作用によって引き起こされた認識の切断によっている。その意味で、「中断」をとまなわない途切れ相の用法は叙想的であるといえよう。

このように「ていた」が表す事態が現在も継続している場合に「ていたところだ」の文をつかって表現すれば、ひとつづきの<動作継続>のなかで、現在とは切り離された一部分のみを認識し、それを現在の時点からアスペクト相として捉えかえしていることになる。これが叙想的な途切れ相の用法である。図5-2を参照されたい。

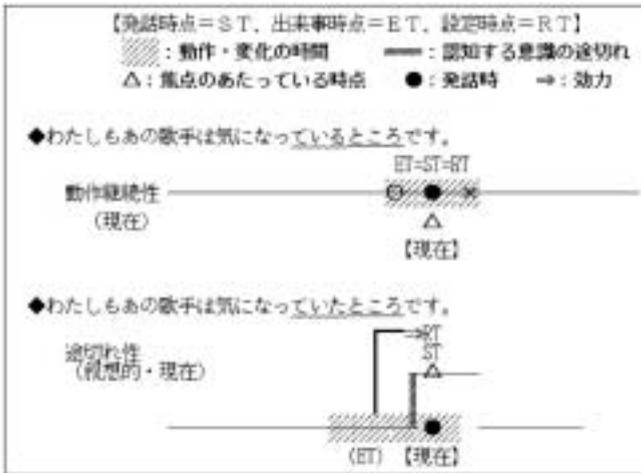


図 5-2

ところで藤城(1996)は、この叙想的な途切れ相の用法と同じように「ていた」がひとつづきの<動作継続>のなかの1点のみにスポットライトをあてて、それ以外の部分については後景化させる用法があることを指摘

している。たとえば、

- 13) 弟は友達と野球を見に行くと言っていましたから、行かないだろうと思いますよ。〈フ〉

というとき、「言いました」は使われず「言っていました」が使われる。藤城(1996)はこれを「感知の視点を表す」用法とし、「話者が、ある出来事を(外から)感知したものとして提示し、そうすることによって、その出来事と、話者または登場人物との接点のあり方を表そうとする」ものと分析している。藤城があげている例だが、つぎのような現象がある。

- 14) 看護婦1 : 田中さん、今日はちゃんとごはん食べた?

看護婦2 : ええ、きれいに{ 食べましたよ / 食べてましたよ }

- 15) 看護婦1 : 田中さん、今日はちゃんとごはん食べた?

田中(患者) : ええ、きれいに{ 食べましたよ / × 食べてましたよ }

このように、感知を表す「ていた」は話者本人の行動に対しては使われず、話者が現場で直接感知した外界の事実をそのまま聞き手に差し出すようなときに使われる。これは、過去において終了したことがわかっている動きを、あえて<完成相>の形式で表現せずに<動作継続>の形式で表現することによって成立する「ていた」の派生的な用法である。この用法を図示すれば、図5-3のようになるであろう。

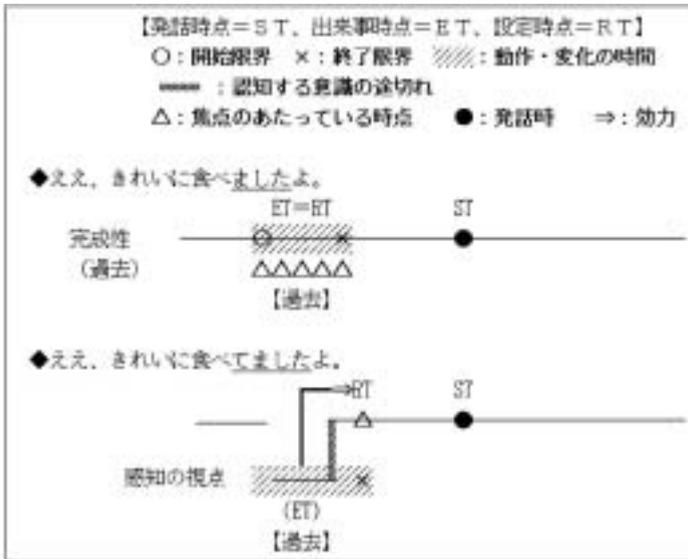


図 5-3

この図をさきほどの「途切れ性」を図示したものと比較すれば、「過去」と「現在」とは違っているものの類似した構造を持っていることがわかる。それは、ひとことで言えば、「認知する意識の途切れ」があるということである。この「意識の途切れ」のために、通常は完成相で表されるものが継続相の形式になったものが「認知の視点」の用法であり、通常は継続相であらわされるものが途切れ相の形式になったものが叙想的な途切れ性の用法であるといえる。

これは、別のいいかたをすれば、完成相で表されるひとまとまりの運動のひとまとまりとして捉えずに、その部分を取りだして述べ立てる話者の表現意図を反映した形式のことをアスペクトと呼ぶことができ、完成相から終了限界を取りさって動きの途中にある一部分のみを取りだすのが動作継続相であり、その動作継続相が示す継続性が現在をまたいでいるときに、現在の直前までの部分で認識を切断して、それを現在にむけて差し出したものが途切れ相であるということであろう。

藤城 (1996) の「認知の視点を表す」用法は、過去のある時点における

事態を切り取って進行継続する様子に焦点をあてて表現するものだが、そこに、途切れ相と同じく、認知する意識の途切れも表されているということを見た。一方、「ていたところだ」で終結する表現における「途切れ相現在」は「認知する意識の途切れ」が発話時現在の直前に起きているなどのために「タ」がアスペクト的になり、現在における途切れ後の状態解釈に焦点が当たったものだと言えよう。いずれも、客観的な事態とは別の「認知する意識の途切れ」の叙想的な表現を含んでいる。

## 6. 「ている」と「ていた」の叙想性

以上、「テイ(ル)」の用法のうち、それぞれ、結果残存の用法が「ている」「ていた」の形で、進行継続の用法が「ていた」の形で、叙想性を帯びる例を考察してきた。前者は、「ている」「ていた」が後接している動詞が表すべき変化や動作が客観的な現実の事態として存在していないが、存在していることを明確に確認していなくても、それを叙想しつつ目の状態としての事態を結果残存として表現することが、なかば義務的である場合があることを示している。後者は、「ていた」が後接している動詞が表すべき変化や動作が客観的な現実の事態としては完成し終了したことを認識していたり、完成し終了した可能性があったりすることを認識しているにもかかわらず、その過程の一部を切り取って表現することにより、「感知の視点」などの、事態の把握のしかたに関わる異なる主観的な要素の介在とその変容が示されるという点で叙想的である。

どちらにも共通するのは、「テイ(ル)」が変化や動作の過程を切り取って視座のある観察時に結びつける性質が必然的に抱える叙想性が姿を現しているということである。以下、この点について考察する。

3. で、「結果残存」を中心とした「効力持続」「記録」「完了」「反事実」の用法で使われる「テイ(ル)」の構造を次のように図6-1のように示した。

ここでは、スペースBにおけるイベントの終了と、イベント終了以後のスペースAとが結びつくが、「テイ(ル)」の動きにより、イベントが終了するまでの過程は焦点からはずされてしまうので、スペースBは必ずしも

過去の現実でなくてもよいし、スペースAも、そこに何らかの内容が解釈できるのであれば、その内容を明示する必要もなかった。スペースBとスペースAとが「テイ(ル)」でむすばれる「以前/イベント - 以後/非イベント」の関係にあることがはっきりしてさえいれば、スペースそのものは想像スペースでもかまわないのである。よって、これらの用法における「テイ(ル)」の叙想性は、2つのスペースが想像スペースになることによって生まれるということができる。

スペースB [以前/イベント]      スペースA [以後/焦点]

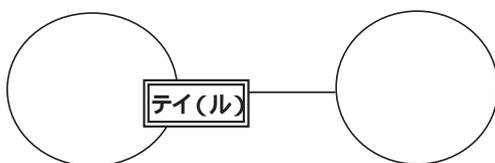


図 6-1

これに対して、進行継続の用法で使用される継続動詞に「テイ(ル)」がつくときには、進行継続しているイベントを切り取って焦点をあて、イベントの進行時間の内に視座がおかれることになる。たとえば、「田中さんは部屋で本を読んでいる。」のような典型的な「進行中」の用法の場合、その全体の意味は図 6-2 のように示すことができる。

スペースB [近過去]      スペースA [現在/焦点/視座]      スペースC [近未来]

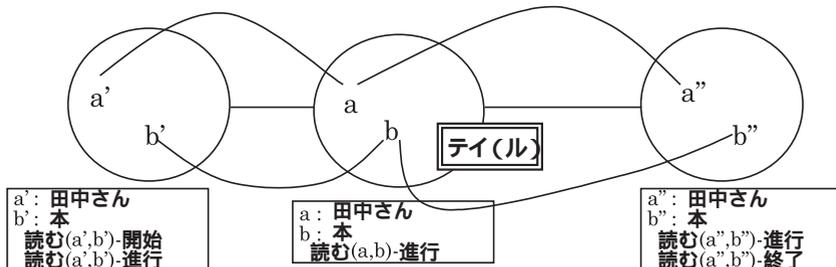


図 6-2

そうすると「スペースA、B、C」からなる合成スペースのなかで「読む(a,b)」が完結した動作として成立することになる。ここで焦点のあたっているスペースAは、話者にとってのアクチュアルな現在の現実であるが、スペースBとスペースCは論理的必然として形成されるものであって、必ずしも観察に基づくものであるとは言えない。その意味で、これらを想像スペースであるということもできるが、ほとんどの場合、それは現実でもあるだろう。

このように、進行継続の用法で使用される継続動詞に「ている」の形がつくときには叙想性は帯びにくい。継続動詞に「テイ(ル)」がついて叙想性を帯びるのは、それが「テいた」の形となって認知する意識の途切れをつくる時であった。この場合、図6-2で「スペースA」に相当するスペースは過去の、ある、意識の途切れの起きた時点となり、図6-2の「スペースC」に相当する現在スペースに視座がおかれる。そして、途切れ自体が叙想的な場合には、現在スペースが必然的に叙想性を帯びることになるのである。たとえば、病院で看護師が巡回後に「田中さんが本を読んでいた。」と報告する場合は、図6-3のようになるであろう。

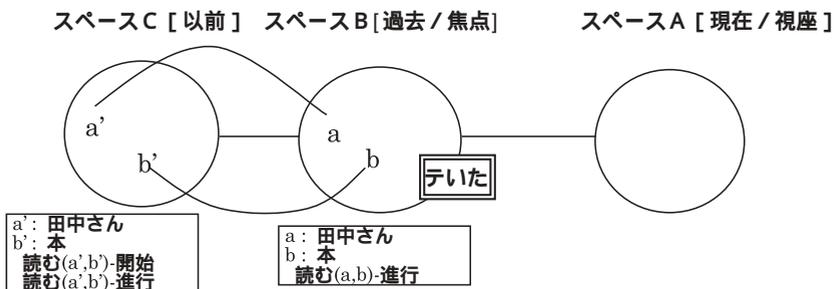


図 6-3

図6-3における「スペースC」はあいかわらず論理的必然として思念された想像スペースであるが、実際には、それはそのまま以前の現実であるといってもさしつかえない。一方、「スペースB」と「スペースA」の関係は、論理的必然ではなく、認知する意識の途切れをはさんだ前後の関係になる。

従って、そこからさらに「スペースB」が現在の直前のところまで接近

し、「スペースA」に焦点のあたる途切れ相として「ていた」が機能するときには多かれ少なかれ叙想性を帯びて含意を表す「スペースD」が導入される。たとえば、「ちょうどあなたのことを考えていたところでした。」という文のときには、その意味は図6-4のようになる。

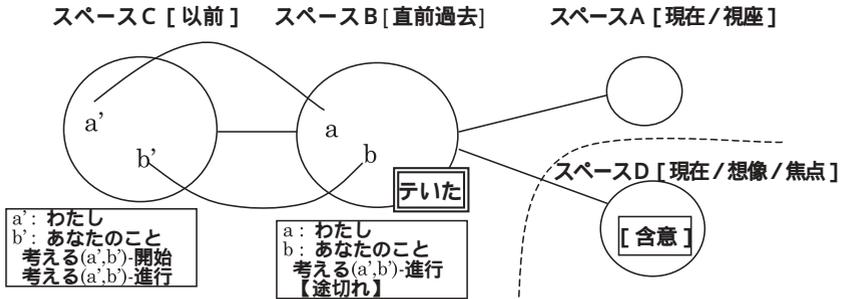


図 6-4

「スペースD」に、どのような内容が入るかは、最終的には文脈にもとづく聞き手の解釈にゆだねられる。ふたたび「あなたのことを考え続けている」かもしれないし、そうでないかもしれない。それは状況と文脈と解釈しだいである。ここでは、「ていた」による途切れの効果として、「スペースB」と「スペースA」の関係が、「結果残存」を中心とした「効力持続」「記録」「完了」「反事実」の用法のときのスペース間関係に類似した構造を持つに至ったことを確認したい。そして、それぞれが「途切れ相」の文における叙想性が発生する仕組みであるということが明らかになった。

最後に、本稿で論じたことと、従来から指摘されてきた「叙想的テンス」との関係について、簡単に述べておく。1. で述べたように、益岡(2000)は叙想的テンスの「タ」を6種類に分類したうち、「発見」の用法として次のような例をあげている。ここでは、それについて検討する。

16) ああ、こんなところにあった。

これと同じ状況で「ああ、こんなところに置いてあった。」「ああ、こんなところに落ちていた。」などと言うこともできる。このときの「テあった」「テいた」も、「発見」の文に使用されていると言えよう。「発見」の用法については益岡（2000）も従来の研究をふまえたうえで見解を述べているが、「予め想定していたこととは違った事態に話し手が気づいた」ということを表すことが典型的であることは、論者の意見が一致している。たとえば、探し物がテーブルの下にあるのを見つけて

17) やっぱりここに落ちていた。

ということが出来るが、これは、「落ちている」のを見て発話するまでの間、「落ちていた」という事実を確認したわけではなく、あくまで眼前の事実をみながら「テいた」の形をつかっているのが特徴である。あるいは、

18)(外に出てみて) やっぱり雨が降っていた。

も、「発見」の叙想的テンスの文に属する。これらと、

19)(窓のない部屋の中で) 雨が降ってきたかと思っていたところだ。  
す。

のような途切れ相の「テいた」文は、ともに「タ」が使われていながら現在の状況を説明している点が類似している。しかし結論から言うと、19)は「発見」の文にも、その他の「叙想的テンス」の範疇にも含めるべきではないと考える。以下、その理由を示す。

まず第一に、「発見」の文である17)18)の「テいた」は「テいたところだ」には書き換えられない。

17') \* やっぱりここに落ちていたところだ。

18') (外に出てみて) \* やっぱり雨が降っていたところだ。

次に益岡（2000）も指摘するように、これらの「発見」の文は、過去の状

態について言及しているのではないということが明らかにわかっているという前提で、以前から「想定」していたことと現在の事実とを関連づけ、想定がただしかったか、まちがっていたかを述べる形式であるのに対して、19)には、そのような基準時以前の「想定」は関係せず、むしろ「思っていた」ことが、その後に明らかになる事実によって中断・変容することを示している。

このことを図示すると、以下のようになるだろう。まず、19)は図6-4と同様に図6-5のようになる。

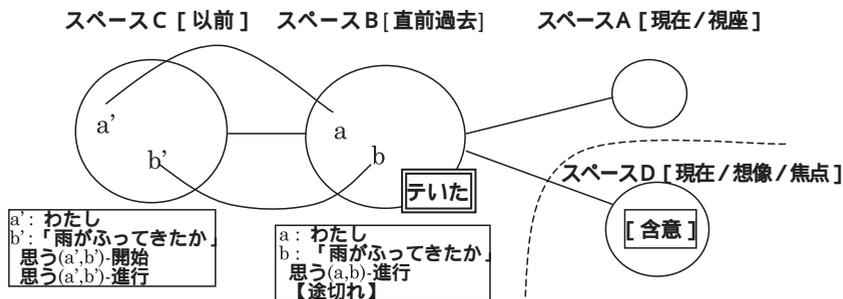


図 6-5

一方、18)は、図6-6のようになるだろう。

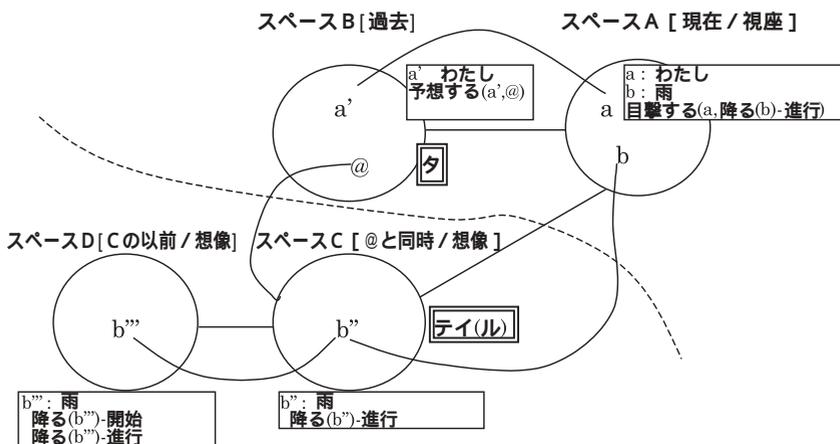


図 6-6

ここで、「スペースB」にある「@」は天気についての予想を表すが、その具体的な内容は事実の領域ではなく、想像の領域に作られるスペースである。実際には予想の段階で「@」には定まった値はなく、たとえば「晴れている」「曇っている」「雨が降っている」というような天気に関する内容のことが可能性としてあるにすぎない。ところが、「スペースA」で「雨が降っている」という事態が目撃されることにより、「@」に入るべきだった内容が「スペースC」として設定される。それは推論によるものだから想像スペースであるが、同時に、いま現在、雨が降っている以上、少し前にも雨が降っていただろうという推論が自然である分、ほぼ事実と認定することができる。「スペースC」は、このような性格を持つがゆえに、「スペースB」の「@」の解として認定され「スペースB」をとおして「タ」のついた事実あつかいのことがらとして表現される。これが「発見の文」の構造である。

こうした「発見の文」の構造において、「目撃」などのアクチュアルな事実としての認知を表す現在スペースが過去にさかのぼって想像スペースを生成することができるのは、図6-6にも示したように、それらのスペースにおける事態が「テイ(ル)」で表されていることだからである。具体的に言うと、図6-6において「スペースA」から「スペースC」が生成するのは、現在において「雨が降っている」ということは、ごく近い過去においても同様に「雨が降っている」という事態が成立していると考えてよいからである。こうした推論は、「スペースA」における事態が状態性のものであるということによって成り立っている。

したがって、16)が「テイ(ル)」がないのに「発見の文」として成り立つのも、動詞「ある」が状態動詞であるからだと言える。

再掲 16) ああ、こんなところにあった。

これは図6-7のように示される。

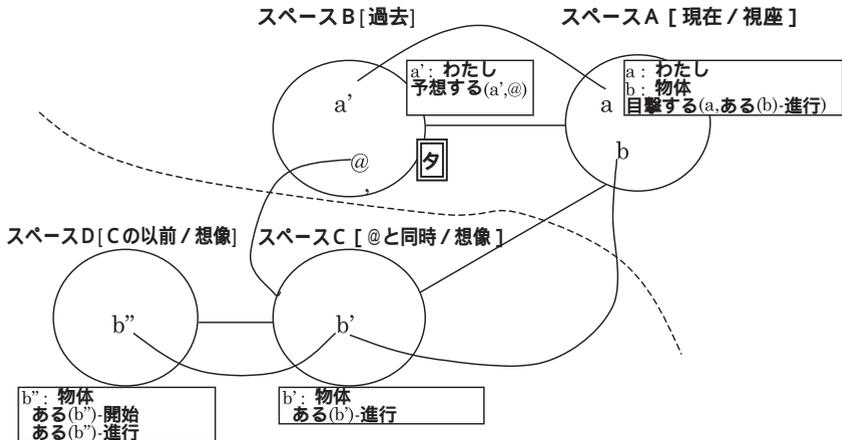


図 6-7

図 6-7 において、「スペース A」の「目撃する (a,ある (b))」から「スペース C」の「ある (b')」を生成することができるのは、「ある」が状態動詞であり「テイ (ル)」がなくても「-進行」の属性を有しており、「現在『ある』ものは、その直前においても『ある』と推論できるからである。その推論が成り立つゆえに、「スペース C」は「物体がどこにあるか」という課題設定をした「スペース B」と同時である過去の時点にさかのぼった設定が可能であり、「@」<sup>5)</sup>の位置に代入されて「タ」がつくことになる。

本稿は、述語に「ている」「ていた」がついた文における叙想性について考察してきた。これには、目前のある状態を述べてそれに先立つ変化の存在を叙想するもの、感知した状態や途切れた状態、または記録されたできごとを述べてその後どうであるかを含意とするもの、反事実の仮定にもとづく推論を述べてその後どうであるかを含意とするものなどがあつた。これらは、「テイ (ル)」が切り取ったことがらの前後に、状態や意味づけの変化があることを想像の基礎としている。図 6-5 に示した「途切れの文」も、直前に途切れた思考がどのように変化したかを含意とするものである。一方、図 6-6, 6-7 に示した「発見の文」は、目前のある状態から直前の状態を叙想し、それに過去の事実としての資格をあたえるものである。これは、状態性そのものがもつ「継続する」性質をもとに、観察時とその直前

では変化がないということ想像の基礎としている。そのため、この「発見の文」は、動作動詞や変化動詞に「ていた」がついたものだけでなく、状態動詞のタ形においても成立するのである。

ここでは、「発見の文」における叙想性は「叙想的テンス」によるものではなく、状態性のもつ性質から生まれるものであることと、そこでの「タ」は「予想した」という過去における問題設定の叙実的な表現のために使われているということとを主張するととどめ、従来「叙想的テンス」の用法とされてきたその他の種類の文と、そこにおける「タ」の機能の分析、および本稿であつた問題との関連については今後の研究課題としたい。

#### 【注】

- 1) 本稿で「テ」「タ」は、それぞれ動詞のテ形(「て」や「で」でおわる形)、タ形(「た」や「だ」でおわる形)を指す。「ている」「ていた」は、それぞれ実際に文のなかでテ形に補助動詞の「いる」が接続しているときに、それぞれ「いる」に「タ」がついていないものと、ついているものを指し、両者を区別して扱おうとするものである。また、「テイ(ル)」と表記したものは、「ている」「ていた」に共通の要素として抽出した(「ている」から「タがついていない」、「ていた」から「タがついている」ということを、それぞれ捨象した)ものを表す。
- 2) ここで「観察」「探索」としたのは、定延(2008)が、いわゆる「思い出し」や「反実仮想」の文における「タ」について、記憶や、情報にアクセスしようとした体験や行動選択の分岐点などをアクセスポイントとしたうえで、「事態が起きたのが過去」というような素朴な考えに代わって「選択されるアクセスポイントが過去」という新しい考えを取り入れる必要がある。(p.115)と述べ、「発見」の文においては「探索意識」がアクセスポイントをつくと論じていることを念頭においている。井元(2010)の説明もこれと整合的である。
- 3) スペースの合成については、フォコニエ(1996)を参照。本稿の図においては、論旨に影響しないと判断し、合成される前のスペースのみ表示している。
- 4) フォコニエ(1996)に従えば、「しない」という否定は親スペース内に否定スペースを作成して表示すべきであろうが、ここでは論旨に影響しないと判断し、否定の内容の動詞があるものとして簡略に表示した。
- 5) 引用節の内容を「@」と表示して別個のスペースに対応させる表示のしかたは、Cutrer(1994)に従った。

## 【文例の出典】

- 《フ》：『新文化初級日本語』 文化外国語専門学校  
《ジ》：http://www.mbs.jp/quake/weekly/20010203.htm 「週刊地震概況」  
《オ》：http://qa.mapion.co.jp/qa5974928.html 「お答えマビオン」

## 【参考文献】

- Cutrer.M. 1994 “ Time and Tense in narrative and in everyday language ”  
Ph.D.thesis, University of California San Diego.
- ジル・フォコニエ 1996 『新版メンタル・スペース』  
(原著：Gilles Fauconnier 1994 “ MENTAL SPACES ”) 白水社
- 秋月康夫 2003 『「ていたところ」が表す局面としての「途切れ」層』日本語教育 117号
- 生越直樹 1997 「朝鮮語と日本語の過去形の使い方について  
- 結果状態形との関係を中心に - 」  
『日本語と外国語との対象研究 日本語と朝鮮語下巻研究論文集』国立国語研究所
- 庵功雄 高梨新乃 中西久実子 山田敏弘  
2000 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 井上優 生越直樹 1997  
「過去形の使用に関わる語用論的要因 - 日本語と朝鮮語の場合 - 」  
国立国語研究所編 『日本語科学』国書刊行会
- 井上優 2001 「現代日本語の「タ」「た」の言語学」ひつじ書房
- 井元秀剛 2010 『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』ひつじ書房
- 奥田靖雄 1977 「アスペクトの研究をめぐって - 金田一的段階 - 」  
『国語国文』8 宮城教育大学
- 川越菜穂子 1989 「トコロダ文の意味と構造 - 情報のなわばりとの関連で - - 」  
『日本学報』8 大阪大学文学部日文学研究室
- 川越菜穂子 1995 「トコロダとバカリダ」  
『日本語類義表現の文法』上 単文編 くろしお出版 所収
- 金田一春彦 1950 「国語動詞の一分類」『言語研究』15  
(『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房に再録)
- 工藤真由美 1995 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- グループ・ジャマシイ 1998 『日本語文型辞典』くろしお出版
- 定延利之 2008 『煩惱の文法』ちくま新書 730 筑摩書房
- 鈴木重幸 1972 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 鈴木重幸 1979 「現代日本語の動詞のテンス  
- - 終止的な述語につかわれた完成相の叙述法断定のばあい - - 」  
言語学研究会編 『言語の研究』むぎ書房
- 菅 美庚 2003 『メンタル・スペース理論と過去・完了形式 - 日本語と韓国語の対照 - 』

寺村秀夫 1971 「タ」の意味と機能

- - アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ」

岩倉具実教授退職記念論文集『言語学と日本語問題』くろしお出版

(『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版に再収)

寺村秀夫 1978a 「連体修飾のシンタクスと意味 - その 4 - 」

『日本語・日本文化』7号 大阪外国語大学留学生別科

(『寺村秀夫論文集』くろしお出版に再収)

寺村秀夫 1978b 「「トコロ」の意味と機能」『語文』34 輯 大阪大学文学部国文学科

(『寺村秀夫論文集』くろしお出版に再収)

寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版

中島孝幸 1995 『現代日本語の連体修飾節における動詞の形について

ル形・タ形とテイル形・テイタ形』『人文論叢 第 12 号』三重大学

朴素暎 1999 『「ところだ」「ばかりだ」の意味用法研究』釜山大学校硕士学位論文

藤井正 1966 『「動詞+ている」の意味』『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 所収

藤城浩子 1996 「シテイタのもうひとつの機能」『日本語教育』88

益岡隆志 2000 『日本語文法の諸相』くろしお出版

松田文子 1998 「眼前事態描写における「タ」の機能」『日本語教育』97

森山卓郎 1984 「～ばかりだノ～ところだ」『日本語学』3-10 明治書院

吉川武時 1973 「現代日本語のアスペクトの研究」

『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 所収